氏　　名	今出敏彦（いまで　とし　ひこ）

（論文内容の要旨）

本論文の課題は、20世紀の全体主義的支配との思想的対決を通じて、人間の自由と共生について深く思索した、ハンナ・アーレントの政治思想の独自性を彼女のキリスト教理解との連関において、解明することである。アーレントの政治思想の独自性は、一人一人の人間の「誕生」（Birth）を、この世界への「新しい始まり」の導入として扱い、また「誕生」を彼女の政治的思考の中心的カテゴリーに据えたことにあるが、アーレントによれば、西欧政治哲学の伝統は、古代において概念化されたこの人間の政治的経験を歪めてしまった。しかも、その西欧的伝統を近代から現代まで一貫する視点で捉えるならば、そこには全体主義的支配との連関が指摘できると言う。他方、今や、この伝統は崩壊し、我々には再び、人間の生の経験を我々自身の視点において捉える可能性も存するのである。アーレントは、この西欧的伝統の歴史が崩壊の過程であると同時に結晶化の過程であるという洞察を手掛かりにして、人間の政治的経験の再発見を企図するのである。

序論―先行研究の検討と問題設定

序論では、アーレントについての先行研究の詳細な検討に基づいて、本論文で論じられるべき問題の明確化が行われた。その内容は、以下の通りである。

多様化するアーレント評価の変遷に際して、それでもなお彼女の思想の核心とされるのが、「世界への愛」（amor mudi）である。これは、世界疎外に対抗し、政治の復権を企図する概念と理解されているが、もちろん、このような様相を保持するアーレントの「世界への愛」もまた、様々に解釈される。研究者の amor mundi 解釈の分岐点は、アーレントのキリスト教理解の視点を巡って、次の２つに大別できる。A）アーレントのキリスト教理解を評価する立場、J.ベルナウアー、J.クリステヴァ等、少数の論者、B）アーレントのキリスト教理解を前提としない立場、R.ベイナー、J.ハーバーマスや多くの論者、である。A）の立場の代表であるベル

ナウアーによれば、amor mundi は、神的愛への積極的な関与として評価できる。しかし、この解釈は、アーレントのキリスト教理解とは矛盾する。アーレントはキリスト教の超世界性を世界疎外の原因と考えており、公的なものを巡る議論において彼女はキリスト教を批判している。ベルナウアーは、アーレントがキリスト教を誤解していると結論づける。本論文では、ベルナウアーとの比較において、１）世界疎外とキリスト教の関係、２）人間の「出生」（natality）とキリスト教信仰の関係、３）「共同責任」と人類の理念の解釈、の三つの問題が検討された。

B) の立場において、アーレントのキリスト教理解を前提としない根拠は、アーレントのアウグスティヌス解釈に求められている。アーレントの博士論文を英訳した J.スコットは、アーレントが「アウグスティヌスのカトリック教会での役割について沈黙する」ことを取り上げ、アーレントは、キリスト教と政治を明確に区分する立場を取ることを強調する。又、アーレント研究の権威であるベイナーも、アーレントのアウグスティヌス解釈にキリスト教と政治の関係性を見出そうとする研究には否定的である。それは、アウグスティヌスのキリスト教信者故の超世界性とアーレントの世界への積極的関与は、「世界への愛」の解釈において全く正反対の立場を帰結すると判断されたからである。さらに、ハーバーマスは、アーレントのキリスト教理解については議論せず、「公的なもの」の模範が有する古代ギリシアのポリスに由来するという古典的性格を、アーレントが現代の政治的問題を批判的に論じる際に浮かび上がらせた点を評価する一方で、その古典理論への固執故に、アーレントの公共性概念は現代の諸状況に適用できないと断定した。

ハーバーマスに代表される近代論的なアーレント解釈を克服するために、D.R.ヴィラは、アーレントが提出した「世界疎外」という概念の意義を強調する。世界疎外こそ、アーレントが近代の根本特徴であると捉えた重要な事実であり、全体主義的支配を可能にしたものである。ヴィラによれば、アーレントの行為論は、アリストテレスの単なる継承ではなく、世界疎外の系譜を辿りつつ、政治思想の伝統では認められなかった行為の意味を「取り戻す」（recover）ものであるという。ヴィラは、アーレントが展開したアゴーン民主主義の意義を評価し、「公」と「私」の区別を

維持しつつ、自由と公共精神の意義を強調するその概念は、彼女が提示した最も重要なものの一つであると言う。以上、それぞれ強調点が異なるアーレント解釈の特徴について触れたが、アーレントの「公的なもの」の模範を古代ギリシアのポリスと断定する点では、皆一致している。

これらとは異なり、高橋哲哉は、アーレントが「赦し」を徹底した世俗的・政治的経験として取り出そうとしながら、まさにその世俗的・政治的経験としての赦しの役割を発見したのは「ナザレのイエス」であったと主張する点に、彼女の思想の独創性を認める。そして、アーレントの行為概念を支える理論についても鋭い指摘を行っている。アーレントが、赦しの政治的意義の発見の「萌芽」として「敗北者を大切にする」という「ローマ的原理」を挙げ、こうした原理は「ギリシア人にはまったく知られていなかった」としていることの矛盾の指摘である。『人間の条件』全編にわたって、「行為」としての政治がギリシア・ポリスの経験を決定的なモデルとして描き出されていることは周知の事実である。とすれば、赦しなしには成り立ち得ないはずの「行為」としての政治が、赦しの意義に気づく「萌芽」さえなかったギリシア・ポリスでなぜ典型的に開花したのか、この奇妙な事態が説明されねばならないことになる。本論文では、この高橋の指摘を念頭に考察が行われた。

以上の序論における先行研究の検討に基づいて、本論文において論者は、ハンナ・アーレントの政治思想における主著である『人間の条件』の問題意識を探り、多層的でキーワードの並存する彼女の思想を貫く視点を明確化するという目標を設定した。

本論（第一章から第四章）の構成と内容

まず第一章「アーレントの現代理解の視点を求めて」では、アーレントの政治思想が展開される歴史的文脈について、『人間の条件』を手がかりに分析が行われた。アーレントは現代の問題状況を、その前史をなす近代の道程を歴史的に跡付けることによって浮かび上がらせているが、現代世界の開始を告げるものとして取り上げられる出来事のうちで、特に注目すべきは、地球や人間を根本的に破壊する力と、

人間の生を単なる有機的生命と見なし、人間自らの「生命」を再創造する可能性とを現代人に与えた、近代科学の成立である。近代科学は、小作農の土地収用から全体主義の成立にまで至る近代の社会化プロセスを推進するものとなった。

第二章「Vita Activa を導入する」では、アーレントの行為論について、その基本諸概念(労働、仕事、行為の三つの基本的活動力、および行為の脆さ。公的と私的の区分)の分析が行われた。それによって、アーレントが、行為概念について、古代ギリシアのポリスにおける政治的経験と、イエスの教えに基づく赦しの力という二つの起源を分節していることが明らかになった。アーレントの公共性概念の基礎にある世界概念の二重性は、この行為概念の二重性に相即するものであって、これは、人間の生が、不死と永遠の相の下で二重化して捉えられたことを意味している。

続く第三章「Vita Activa としての精神の生」では、第二章で明らかにされたアーレントの行為論の基本構造が、アーレントの思考論と意志論という二つの理論的基盤に基づいていることが論じられた。『人間の条件』で問題となった「世界疎外」は、近代を特徴付け、現代の全体主義を帰結するものとされる一方で、それは単に克服されるべき悪として構想されたのではなかった。むしろ、アーレントは、「世界疎外」の源泉と意義を、「人間の条件の再考」を通じて顕わにすることを目指していたのであって、この問題は、『精神の生』における思考と意志の理論的分析の課題に他ならない。アーレントは人間の思考の特性を「一者の中の二者」と捉えているが、これは、人間が自らの存在を反省するだけでなく、自らの社会的生をも問題にすることを可能にしているのであって、それが『精神の生』における「世界からの退きこもり」の意義なのである。Vita Activa としての「精神の生」を分析することで、「一者の中の二者」が人間の複数性といわば媒介されることによって、「始まりをなす」能力（意志の自由）に関係していることが明らかにされた。

第四章「生の二重化としての Vita Activa」では、以上のアーレントの行為論が彼女のキリスト教理解との有機的な関連において形成されたことが、アウグスティヌスをテーマとしたアーレントの学位論文に遡って論じられた。こうしたアーレン

トのキリスト教理解を分析することによって、彼女の「公的なもの」が、古代ギリシアのポリスにのみ由来するものではなく、別の脈絡を有していることが明らかになった。アーレントは、キリスト教思想における意志論の系譜を辿りつつ、人間の生の概念化の変遷を探求している。それは、人間の生を、一方において、愛における統一、世界と和解するキリスト教の可能性として、他方において、人間の自由の正当化として、つまり、その二重性において描くものであり、これが政治や公共性をめぐるアーレントの思索を方向付けたものだったのである。

結論ーアーレントの独創性

以上の議論から、次のような結論が導かれた。

アーレントの思想の独創性について、研究者の共通理解は、彼女が一人一人の人間の「誕生」を、この世界への「新しい始まり」の導入として扱い、政治的思考の中心的カテゴリーに据えたことであるが、先行研究に共通する問題点は、公共性における「明証性の逆説」を取り上げなかったことにある。本論では、アーレントの言うキリスト教の政治的な意義が、「公的」と「私的」の間の領域において、以前は公的な問題であるとされた事柄の調整を主張する「正義の実現」にあるとの確認がなされた。しかし、アーレントが明らかにしたキリスト教的政治の役割は、公的領域とは対立しながら逆説的に公共的であるというその規範的な公共性において理解されねばならない。

我々は、アーレントの『人間の条件』の再考を通じて、彼女の行為概念とキリスト教理解（キリスト教的政治の素描）を分析し、その連関から、アーレントの思想の独創性を明らかにした。それは、人間の生が、自らの生を照らし出し問いかける精神と、人間の複数性における政治的行為とに二重化され、この世界に新しい始まりを出現させる「公的なもの」に結晶化するということに他ならない。人間の生の二重化としての Vita Activa は、その結晶化によって、人間が自らの生を問い得る能力となり、社会の本性を照らし出す公共性の原理となる。しかし、人間が自らの生を自覚し、自らに問いかけることができるのは、予期せぬ逆説的な仕方において

なのである。

アーレントの博士論文から遺著に至る、アウグスティヌスの愛概念の分析によって彼女が目指したものは、人間の罪深さの自覚と、それへの赦しと愛をもたらすキリスト教における人間の罪告白の可能性を探求することであった。しかし、その可能性が明らかになったのは、キリスト教世界における伝統の崩壊の自覚という逆説な事態においてだったのである。それによって、アーレントは、キリスト教世界の人々に対して自らの傲慢を告白することを強く促したと言える。伝統の崩壊過程は同時にその結晶化過程でもあるというアーレントのキリスト教理解の視点が持つ意義は、単にキリスト教世界に留まらず、現代における人間の生が、傲慢から浄化される可能性を告げ知らせたことであり、この新しい約束の及ぶ範囲は、正に公共的なのである。

氏　　名	今出敏彦（いまで　とし　ひこ）

（論文審査の結果の要旨）

ハンナ・アーレント(Hannah Arendt, 1906-1975)は、公共性の復権を掲げた独自の政治思想において知られた、現代の政治哲学を代表する思想家である。その影響は、哲学や政治思想はもちろん、倫理学から宗教学、そしてキリスト教思想研究にまで広範に及んでおり、アーレントをめぐる研究文献は近年著しい増加傾向にある。本論文の論者は、主著『人間の条件』におけるアーレントの問題意識を明確化することによって、重層的に展開されるアーレントの思想の基本構造の解明を目指すとともに、アーレントの思想的営為の中に通奏低音のように響いているアーレントのキリスト教理解を取り出すこと、つまり、アーレントにおいて従来の政治哲学への批判とキリスト教思想に依拠した思想構築とが切り結ぶ地点を明らかにすることを試みている。そのために、論者は、特にキリスト教思想との連関で参照すべき先行研究の詳細な検討に基づいて、アーレント思想に内在的な視点に立って議論を進めて行く。しかし同時に、論者はアーレントへの批判的視点も忘れておらず、本論文は本格的なアーレント研究と評することができる。

ナチズムの台頭に対し引き起こされたドイツ教会闘争や1960年代以降の解放の神学、そして9・11同時多発テロ以降の正戦論をめぐる論争など、20世紀以降、キリスト教政治思想（政治神学）は、一貫して、キリスト教思想研究の中心に位置しており、アーレントに関しても、断片的な仕方ではあるが、これまで繰り返し論究がなされてきた。本論文が目指すアーレントの政治哲学とキリスト教思想との関係についての内的で系統だった解明は、こうしたキリスト教思想研究の世界的な動向から見ても重要な研究テーマであり、その成果は、キリスト教思想研究にとって、きわめて大きな意義を有するものと言わねばならない。

本論文の主要な成果は以下の点に認められる。

１．本論文では、『人間の条件』から分析が開始され、アーレントの政治と公共性をめぐる議論の基本構造を取り出す作業が進められたが、その過程で、アーレン

トのアウグスティヌスに関する学位論文（『アウグスティヌスの愛の概念』）から、遺著『精神の生』にまで至る思索の展開が辿られ、アーレントの思索の全貌が明らかにされた。アーレントが取り組んだ多岐にわたる思想的課題について、その全貌を視野に入れた思想の見取り図が提示されたことは、アーレント研究にとって重要な寄与をなすものと言える。

２．論者は、アーレントの思考論において提示された「一者の中の二者」が公共性の条件としての人間の複数性と相互に媒介し合っていることを、説得的に示した。これは、人間的自由の正当化と公共性の復権という二つのテーマの結びつきを示唆するものであり、現代の政治思想の再構築にとって意義深いものであるのはもちろんのこと、キリスト教的政治思想で問題になる、個人の自由と隣人愛の関連性の解明にとっても参照に値するものと言える。

３．従来のアーレント研究では、アーレントにおける「世界への愛」とキリスト教を単純に関連づける試みに対して、それがアウグスティヌス研究においてアーレント自身が強調するキリスト教の「超世界性」、「世界疎外」の議論と整合しないとの指摘がなされてきた。これは、アーレントの政治思想をキリスト教と関連づける際の障害となってきた問題点であるが、論者は、アーレントが、この「世界疎外」こそがいわば逆説的な仕方でキリスト教的政治を帰結した点に注目していることを、緻密な分析によって明らかにした。つまり、キリスト教はその公的・政治的領域の拒否にもかかわらず、正義の実践としての慈善行為を行うことによって、自らの内側から、「キリスト教的政治」を生み出すことができたという議論である。この論点を明確化することにより、これまで研究上の難問となってきた、アーレントとキリスト教との関連づけについて、一つの解答が与えられたと言える。これは、キリスト教的政治思想がいかなる根拠において成立可能であるかを考える上でも示唆的である。

このような様々な点に関して優れたアーレント研究と評価できる本論文にも、いくつかの問題点あるいは不十分な点が見いだされる。たとえば、現代のキリスト教思想における政治論や政治神学（バルト、ボンヘッファー、モルトマン、ゼレなど）

との関連性が十分に視野に入れられていないこと、公共性概念などの基本的事柄について分析に不十分な点が散見されること、そして、論の展開や叙述の仕方において改善の余地が見られることなどである。アーレントにおけるキリスト教的政治とその現代的意義の解明を目指すという本論文の意図から見ても、今後に残された課題は少なくない。

しかしこれらの問題点は、錯綜したアーレントの思索から、キリスト教理解の思想的線を明確に取り出し、それを一貫した思想内容として再構成した論者の力量から判断するならば、今後のさらなる研究によって克服可能なものであり、本論文がアーレント研究として学界に独創的な貢献をなしたことを否定するものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として、十分価値あるものと認められる。2009年１月30日、調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。